

「貪欲に注意しなさい」（ルカ二二章一三〜二一節）

1 貪欲の問題

今日の箇所は、先週のつづきです。群衆に囲まれながら、イエスは、弟子たちに語りつづけています。聞いているのは、当然のことながら、弟子たちだけではありません。大勢の人が聞いています。

そうこうしているうちに群衆の中から、質問の声があがった。質問というより、願いです。ある一人の人が、自分の、個人的とも言えるお願いを、イエスにしたということです。そこから今日の箇所は始まっています。

群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言うてください」。イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」。そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」（一三〜一五節）。

この人は、イエスを「先生」と呼んでいます。イエスの弟子たちも時にイエスを先生と呼んでいますし、ファリサイ派や律法学者も、先生と呼んでいます。彼らの場合は低姿勢をよそおって近づき、陥れようとする意図があつたわけですが、ここではそうではなさそうです。イエスの権威、イエスの知識、それを目の当たりにして問いかけた、願ひ出たのです。

「個人的とも言える願ひ」と申しましたが、彼は家で財産分与のことで不利な扱いを受けているというのです。「兄弟」は、ここで単数なので、おそらく二人兄弟、彼は弟なのでしょう。

もちろん旧約聖書には、こうした相続のことは、律法に詳しく書かれており、掟で決められていました。

一般に長子権というのが認められていて（申命記二二章）、弟としては、分かつていても不満だったのでしよう。

ただ決まっていなかったことも昔はあって、その例が、民数記二七章などにあります。男の子がおらず、嗣業（土地の相続）を断たれることになった五人の娘がモーセに訴えた結果、彼女たちの言い分が通り、モーセの裁定で女も土地を継ぐことになったケースです。それが後々の判例になります。

今日の箇所の場合の法的な関係がどうなっていたか、詳しいことは分かりませんが、今日の箇所の場合、「兄弟に言うてほしい」ということなので、掟で決まっていることは分かった上で、だれかが、何かを言うてくれれば、少しは変わるという程度だったのかも知れません。

しかしイエスはその求めをきっぱり断っています。考えてもみてください。この男は、結局のところ、自分の取り分を、土地であれ、お金であれ、少しでも増やすこと

を願っているのです。そのためにイエスの権威も使おうとしている。もしイエスが「裁判官や調停人」の役を引き受けたとしたら、いずれにせよ、そのような男の、仮に法的に問題はないとしても、心の中にあつた欲望の手助けをすることになります。それはありえないことです。

ありえないこととして、イエスは、その話を打ち切ってもよかつたのですが、そうはしませんでした。

イエスはその間に人間の「食欲」の問題を見たからです。自らの欲望をどこまでも追い求め、満足することを知らない人間の罪です。それはしかし、その男だけの問題ではありません。思い出していたきたいのは、少し前に、イエスが、フアリサイ派の人たちと対峙し、彼らの内側にある、心の中の「強欲」(一一・三九)に触れていたことです。それは人としてだれにでもある問題であつて、それゆえ、イエスに従う者たち、つまり弟子たちにおいて、いや彼らにおいてこそ、なおさらに注意し、なおさらに用心しなければならぬことであつたのです。

2 愚かな金持ちの警え

しかし、そうしてどこまでも自らの欲望を追求することによって、人は幸せを手に入れることはできるのでしょうか。そもそも、人のそうした欲望の追求は目論見通りいくのでしょうか。

イエスは、そうした問いかけを、ここで「一同に」しています。イエスに願いを持ち出したあの男だけではありません。イエスの弟子たちも、その言葉に耳を傾けなければならぬのです。

イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だつた。金持ちは、『どうしよう。作物をしまつておく場所がない』と思ひ巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もつと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまひ、こう自分に言つてやるのだ。へさあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いつたいたいのものになるのか』と言われた」(一六〜二〇節)。

譬えというのは、比喩です。いわば物語仕立ての比喩です。ただこの物語(ストーリー)は作られたものではありません。そうではなくて、実際に起こつたことです。聞いているみんなが、ああ、あのことだと言つて、思ひ出せるような事件、出来事、それが譬えの材料になります。

イエスが語り出した「ある金持ち」についても、聞いていた人はみな知つていたのです。金持ちで、常日頃ああいうことを口にしてきた人が突然死んだということがあつたのでしょうか。この人は、村人から少しうとまれていた、だから死んだとき、人々はまだ同情しなかつた可能性があります。

しかしイエスは、人々が覚えていて、あるいは少し忘れかけている事件に、神の側

から光を当てます。すると、そこに、神の国の真理を語る、それを示すものが浮かび上がってくるのです。

こうしてあの金持ちが突然死んでしまった事件、それを人々がイエスの口から改めて聞いたとき、金持ちとはじつは神の前における私どもでもあることに気がついて人ごとではなくなつただろうと思います。

もう少し立ち入って見てみましょう。問題は食欲でした。この男の食欲さを、私どもは、どこに、見ればよいのでしょうか。

例えば、「豊作だった」ということ、これは、とくに彼が金持ちだったこととは関係はありません。「作物をしまっておく場所」、これも、作物を市場に出す、そして売るまでのあいだ一時保管しておく場所の意味であれば、豊作だったのですから、思案するのは当然です。

しかし、どうも、この譬えでは、一時的な保管場所のことを、この金持ちは考えていなかったようです。いまある倉を壊して、もっと大きな、一生間に合うような倉を建てたのです。

そしてそこに穀物だけでなく、財産も入れて、これで一生遊んで暮らせると、ほくそ笑みます。だれもが一度は夢見るものです。本当に、そうなったら、どんなによいか、しかし、そんなことをしたら何か悪いことが起こるのではないかと、私など不安にかられるでしょうけれど、この金持ちは、そうではありません。そこに金持ちの金持ちたるゆえんがあるのかも知れませんが・・・。

一つの問題は、これが、おそらく小さな村のことだったことです。この金持ちの家でとれる穀物は、いつも、その村では相当の比重をもっていたものではないでしょうか。市場に出されて、みんなの安定した生活に役立っていたものです。それが、いわば農業の倫理です。

しかし、突然の豊作が、彼をおかしくした。多くを蓄えようという欲望が生まれてきたのです。一人だけのためこんだため、村の経済は混乱し、貧富の格差が一気に開いたはずです。

彼の頭には、そこで暮らしている人々のことは頭に思い浮かびませんでした。そして自分一人だけ安楽な生活を求めようとしたところに、彼の強欲、むさぼり、貪欲があるのです。貪欲とは、隣人を忘れることでもあります。したがって、愚かにも、神を忘れたのです。

3 神の恵みの支配

改めて言うまでもないことですが、この金持ちの、いわば生涯幸せ計画は、彼が生きていればのことです(ヤコブ四・一五)。果たして、彼は、イエスの譬えによれば、自分の魂、つまり自分自身に安心を約束した、その夜に命をとられたのです。これはどのように考えればよいのでしょうか。

それは、死は突如として人間に襲いかかる、「死を忘れるな」という、いわば古代人の知恵を人々に印象づけようとして、金持ちの突然の死を、聖書は語っているではありません(J・エレミアス)。

この箇所という言葉、「今夜、お前の命は取り上げられる」は、神はあなたからあなたの命を要求するであろう、もう少し訳せば、あなたから命の返却を求めるであろうという意味です。

私どもがこうして命を与えられ、それを永らえているのは、神が、それを許しておられるからです。私どもの人生は、神から、命を、一定期間、貸し与えられているものです。私どもは、貸与された人生を生きているのです。それをお返しするというのが、私どもの死です。

その意味は、私どもは、つねに、その瞬間瞬間において、命の主、神の前で生きていくということではないでしょうか。この譬えの金持ち、そのことを忘れてしまっていました。

彼は、豊作で喜んだとき、神様の恵みによって、与えられたものとは受けとりませんでした。今年は天気がよくて幸運、作物は良く出来た、それも神の恵みとは少しも考えなかったのです。

豊作で、古い倉を壊し、「もっと大きいもの」を建てたとき、そして自分に、さあこれで安心と言い聞かせた、まさにその時も、神の前で歩んでいたことを、忘れていたのです。その時、命の主、人生を貸与した神の前で生きていることを忘れていたのです。

私どもの人生の終わり、それはずっと先にあつて、そこではじめて神に出会うというのではないのです。この世にあつて、その時その時に、この人生の嵐の時も、晴れの日も、神の前で歩んでいるのです。信仰とは、そうした神、恵みの神、この神をつねに視野に入れて歩むということ以外ではありません。

さて、ここまで辿ってきて、それなら、この金持ちのようでない生き方を、聖書はどのように語っているのでしょうか。

いくつかの聖書箇所が思い出されます。使徒パウロの手紙から引用すれば、例えばフィリピ四・一一、テモテ一、六・六以下などです（他にヘブライ一三・五）。

わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です（フィリピ四・一一〜一三）。

「満足すること」、「足ること」（口語訳）、ここでパウロの使っている言葉はその時代流行した哲学（ストア派）で使われた言葉のようです。しかしパウロはそれを用いながら、それは、神によって可能となる、神のお陰で、そのように生きることができるのだと語っています。

神が、私どもに、私どものすべてに伴い、恵みをもって支配し、導いておられるということ、その神信仰から生まれる生き方、それは、今日の箇所の金持ちが体現している生き方とは正反対の信仰の生き方にほかなりません。こうした生き方を今年も共に志していきたいと願っています。

（一月九日）